【 9 】

氏　　名　沢崎壮宏（さわざきたけひろ）
学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　文博第230号
学位授与の日付　平成14年11月25日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科思想文化学専攻
学位論文題目　デカルトの方法論：普遍学の計画と明証性の超越
——普遍数学から普遍学への昇華と形而上学——

論文調査委員　（主査）教授 伊藤邦武　助教授 福谷　茂　助教授 川添信介

論文内容の要旨

本論文は，デカルトの形而上学の生成過程を，「普遍数学」がら「普遍学」への昇華として特徴づけ，この解釈のもとで理解されるデカルトの形而上学の特異な性格を明らかにしようとしたものである。

デカルトはその生前には公刊されなかった初期著作『精神指導の規則』（以下『規則論』と略記）において，「普遍数学」という名前の学的探究の方法論を構想した。そして『方法序説』において，この方法論を略述するとともに，それに則って構築される形而上学を素描し，さらにその詳細を『省察』および『哲学原理』において展開した。デカルトの理論的発展がこのように，数学に範を仰ぐ方法論の構想から新しい形而上学の構築へ向かったということは，西洋哲学史のいわば常識に属する事柄である。しかし，この理論的発展が厳密にはいかなるものであったのかということについては，『方法序説』の記述によっても必ずしも明らかにされていなかった。そこでこの点について，これまで多くの研究者によってさまざまな解釈がなされてきたのであるが，とくに近年のデカルト研究は，厳密なテキストの考証にもとづいてこれまでの伝統的な解釈を否定し，『規則論』の方法論と『省察』などの形而上学のあいだには，直線的な連続性があるというよりも，むしろ大きな断絶があることを強調するようになった。この断絶を強調する解釈によれば，デカルト哲学は，彼が『規則論』執筆後の1630年前後に表明した，いわゆる「永遠真理の神による創造説」によって，はじめてアリストテレス主義と完全に決別し，生得観念の明証性を基礎にした科学的実在論の知識論を構成することに成功したとされる。そしてこの断絶を認める解釈の傍証として，『方法序説』以降のデカルトのテキストにおける「普遍数学」への言及の不在が挙げられたのである。

本論で筆者は，このような近年の有力な解釈に異を唱え，普遍数学としての方法論はデカルトの形而上学において棄却，精算されたのではなく，むしろ「普遍学」というより抽象化された形態において維持されたのであり，普遍数学にもとづく科学の統一から，普遍学の構想のもとでの形而上学の構築への推移は，普遍数学という方法論自体に内属するメタ理論化の要請を，さらに徹底した結果であると解釈する。そして，『省察』などにおける普遍学への言及の不在は，この構想の消去を示すのではなく，むしろそれが形而上学と自然学とからなる「哲学の樹」の土壌であるとともに，その形成を目的論的に先導する理念であるという事実を示しているのだと解釈する。筆者はこのような解釈のもとで，『規則論』における知識の形式的制約をさらに普遍化したものが，『省察』などにおける形而上学の独自な公理論的展開であるということを，それぞれのテキストの精密な分析によって論証しようとするのである。

本論は全体として三章に分かれ，第一章は「方法」，第二章は「Metamathesis」，第三章は「形而上学の中の方法」と題されている。このうち第一章は，デカルト的な方法論的探究の歴史的背景を述べたものであり，第二章は『規則論』における普遍数学の構想とそれが要請する知識論的諸前提を分析し，第三章は『方法序説』や『省察』に見られる形而上学の普遍学としての特性を明らかにしようとしたものである。これらの三章の内容は以下のとおりである。

まず第一章は，デカルトにおける方法論の重要性の意識が，ベーコンらの反アリストテレス的，反スコラ哲学的運動に連動した，「方法の時代」と呼ばれる当時の思潮に合致したものであることを確認する。この歴史的概観において，とくにデ

カルトの方法論がペトルス・ラムスの『弁証論』における三段論法の批判や，アリストテレスの『オルガノン』の数学への無関心の批判を，かなり忠実に継承したものであることが示される。そのうえで，デカルトの独自性として，三段論法的推論への批判が同時に，認識における直観の優越という思想に結びついている点にあることが指摘される。

次に第二章では，『規則論』における普遍数学の規定，直観としての知識の理論，直観の対象としての単純本性にもとづく存在論の，詳細な分析がなされる。普遍数学の方法とは，任意の対象についてその要素の順序と計量的関係だけを考察する方法であり，その具体的成果が解析幾何学として結実した方法である。しかし筆者はこの方法が実際には，計量的関係以上に順序の特定に重心をおく方法であり，一般の数学が対象の質料を抽象する作業からなるのにたいして，さらにその抽象を繰り返して二次の抽象を行おうとするメタ数学であり，この高次の抽象をつうじて知識の絶対的な確実性を確保しようとする方法論であると解釈する。そして，この二次の抽象によってもたらされる知識の対象は，それが質料から絶対的に抽象された形で精神にたいして透明な存在として現れるという意味で，まさしく直観の対象であり，さらにはそれが直観という単純な働きの対象であるがゆえに，単純本性と名付けられたと解釈する。筆者はまた，デカルトによってこの単純本性相互の結び付きが，それ自体直観にもたらされるものであるとされている点に着目して，単純本性としての知識の対象世界は，精神に生得的な公理的体系に従う世界とならなければならないと解釈する。

そして第三章では，普遍数学をさらに抽象化した学である普遍学として理解しうる，デカルトの形而上学の特徴が分析される。そこでとくに注目されるのは，学の公理的体系性として規定された知識の形式的特性が，形而上学においては，第一公理としての因果性の原理の特異な適用において露にされているという点である。まず，デカルト形而上学の第一の柱であるコギトについては，「思惟するためには存在しなければならない」という推論規則が，方法的懐疑によっても不可疑とされていることを確認しつつ，思惟の具体的な遂行と結びついたこの規則のもつ条件的必然性の働きによって，コギトにおける自我即精神の存在の産出という結果がもたらされている，と分析される。そして，この形而上学の第二の柱である神の存在証明については，神の観念が含む表現的実在性から神の客観的実在性を導く推論の構造が，この観念が指示する神の本性を明らかにするものであり，それは無と事物の作出原因とを媒介する創造力を神の本性として特定するものである，という分析がなされる。このように，デカルトの形而上学は，数学における規則の適用がその対象を生み出すという，形式的構造がもつ独特な因果作用を，さらに抽象的なレベルで適用することによって，観念の明証性がその対象の実在性を生み出すというメカニズムを明らかにしようとしたものであることが判明する。筆者は以上の考察にもとづいて，デカルトの形而上学が昇華された普遍数学の成果であると結論するのである。

論文審査の結果の要旨

デカルトの哲学の理論的発展が，『精神指導の規則』や『方法序説』に見られる方法論的探究から，『省察』や『哲学原理』に見られる形而上学の体系的構築へというコースを辿ったことは，西洋哲学史のいわば常識に属する事柄である。しかし，「普遍数学」と呼ばれるデカルトの初期方法論と，コギトを第一原理とする彼の形而上学の関係が，厳密にはいかなるものであったのかという問題にかんして，近年のデカルト研究の多くは，むしろこの常識に反対する解釈を採用して，『精神指導の規則』の方法論と『省察』などの形而上学のあいだには，連続的な発展ではなく理論的な断絶があったのだということを強調しようとする傾向をもっている。本論文は近年のこの主流的な解釈に異を唱え，普遍数学から形而上学への転換は，方法論的な理念の断絶であるよりも「普遍学」というより抽象度の高い方法への進化であり，この抽象化の徹底は普遍数学という当初の発想そのものに含まれていたものであること，また，デカルトの形而上学はこの普遍学として理解されることによってはじめて，その特異な性格が明らかになるということを論証しようとしたものである。筆者はこれらの点を論証するために，デカルトの膨大なテキストの全体を改めて精査するとともに，これまでの代表的なデカルト解釈を網羅的に吟味するという，非常に包括的な作業を行っている。筆者はこの作業を通じてこれまで見落とされてきたデカルト哲学の特徴に多くの斬新な光を当てることに成功しているが，そのなかでもとくに目立った主張としてあげられるのは次の点である。

(1)デカルトの方法論の著作であるとともに形而上学の最初の著作でもある『方法序説』が，その当初の執筆計画においては「普遍学の構想（le projet d'une science universelle)」という表題のもとに構想されていたことは，書簡その他の資料から確認できることであるが，このことの意義がこれまでの解釈では不当に軽視されてきた。

(2)デカルトの説明によれば，普遍数学は一切の事象の質料を捨象して，「計量関係と順序」のみを扱う方法であるとされているが，実際には計量関係をも捨象して順序のみを考察する抽象数学であることが，『精神指導の規則』の厳密な読解によって明らかになる。このことに着目すると，デカルトによって「思惟の順序」に従って自然と精神と神の観念の内容を解明する学と定義づけられている形而上学が，普遍学の構想のもとで形成された「順序の学」であることが明瞭に理解できるようになる。

(3)『精神指導の規則』においては，思惟の順序を司るのは，単純本性からなる公理的体系のもつ形式的性質であるが，この形式的性質は具体的には，数学における推論規則の適用がその対象を新たに生み出すという独特な因果作用として理解される。そしてデカルトの形而上学の学としての特徴が，因果律を第一公理とする思惟の体系性にあることは，『省察』の叙述の秩序の分析から明らかになる。この解釈によれば，思惟の事実から精神の存在を導くコギトの推論や，神の表現的実在性からその形相的実在性を導く神の存在証明の推論は，いずれも懐疑によって明証的観念のレベルにまで還元された単純本性の体系の，因果的連鎖の解明の作業という性格をもつものであることが明らかになる。

このように，本論におけるデカルト解釈は，方法論と形而上学の関係について，近年主流をなす断絶説を退けて，より伝統的な連続説の復活を目指すものであるが，このことは本論のデカルト解釈の成果が旧来のレベルに逆戻りしているということを意味しているわけではない。むしろ逆に，デカルトの発展の論理をテキストの詳細な分析を通じて再吟味することによって，その形而上学の特異な性格を断絶説による解釈以上に明らかにできるということを示しているのである。

以上のように，本論は新しいデカルト哲学の全体像を提示した力作である。ただし本論にはなお，より一層の注意が払われてしかるべきであったと思われる点もある。そのひとつは，自説と最近の有力な諸解釈との相違を強調するあまり，それらの解釈どうしのあいだにも存在する対立点がぼかされているという点である。また，デカルト哲学の特異な性格を浮き彫りにするために参照された，トマスなど，デカルトに先行する伝統的形而上学の説明が表面的なものにとどまっている点も惜しまれる。しかしこれらの点は，新しいデカルト解釈としての本論の価値を著しく損なうものではない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2002年7月25日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。